

本願寺御影堂 鬘股(かえるまた)の飛天・迦陵頻伽 写真提供:京都府教育委員会文化財保護課

Buddhist Music — Newsletter

佛教音楽

ニュースレター

- 新所長着任あいさつ — 小野功龍
- 連載 — 本願寺 折々の文化：籠谷眞智子
- 仏教音楽展望 — 仏教音楽は何を伝えるのか?：福本康之
- クローズアップ — 歌い継がれるみ法の響き
- 交流のひろば — 歌に聞く：鹿多証道
寺族婦人の輪：コール無憂華
- 情報コーナー — 研究所に寄せられた情報
みる・きく・よむ：『こどものおつとめ』ほか
- 資料庫から — 資料が語るあの時あの場所
仏教洋楽人物プロフィール
歌ってみませんか?
- 研究所だより — 平成17年度活動報告 ほか

掲載記事・情報募集中!

教区・お寺での仏教音楽活動
様々な合唱団活動
学校・幼稚園・保育園での音楽活動
法要・イベント・記念式典など
皆さまからの情報をお待ちしています

浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
本願寺仏教音楽・儀礼研究所

〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地
本願寺第3庁舎内
TEL.075(371)9244 FAX.075(371)5761

<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>





所長着任にあたってのあいさつ

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 所長
小野 功 龍



この度御縁をいただきまして、本願寺仏教音楽・儀礼研究所の所長を拝命いたしました。

長年音楽系の大学で研究と教育に携わってまいりました私にとりまして、今度はご本山の中の機関で働かせていただくことになり、いささかのとまどいもございましたが、研究と実践活動にいそまれる研究員の方々、そしてそれらの活動を支えられる事務職員の方々の日々の御活躍を眼のあたりにいたしまして、この研究所が単に研究のみに明け暮れる機関ではなく、その成果を現代に即応させていく実践機関でもあることを強く感得いたしました。今では私が積年学ばせていただいた物をお返しするに最も相応しい御恩報謝の場所であると喜ばせていただいております。

もし儀礼のもつ伝統性を横軸の数値にとるならば、社会性を縦軸の数値に取るべきでありましょう。そしてその交点の座標がその時代時代に求められる儀礼の姿ではないかと思えます。現在わが宗門には伝統的な声明、雅楽やそれに伴う法式が厳然と存在し、それらと共に明治時代以来の洋楽によるあまたの仏教讃歌も存在し、創作演奏活動も旺盛に行われております。私たちは現在を分析して私たちが今どの座標点にあるのかを再認識し、来るべき次の時代の座標へ向かって実践活動を促していくことも課せられた大きな仕事の一つであろうかと考えます。

そのためにはこの機関において地道な研究実践活動に尽くしてこられた諸先賢の方々、御法味愛楽の中に讃歌を口ずさまれるすべての方々の、熱い想いを心より願うしだいであります。来る親鸞聖人750回大遠忌には、お念仏の喜びに溢れる仏教音楽がご本山の境内から、広く国内外に及んでいくことを心より願わずにはおれません。

仏教音楽 展望

その昔、聖徳太子が楽人たちに伎楽を習得させ、仏教弘通の手段として奨励したように、日本における仏教音楽の歴史は、仏教の伝来とともに始まりました。時は流れ、明治の新政府が近代化政策の一環として西洋音楽の導入に着手すると、それに呼応するかのよう

に、仏教界においても、西洋音楽のスタイルによる仏教の音楽(=仏教洋楽)が誕生しました(その最初期の作品《法の深山》は明治20年ごろ発表されました)。以来、数多くの仏教洋楽作品が発表され、今日では、宗門内外のさまざまな機会に聴かれるまでになりました。とくに本願寺派での仏教洋楽に対する盛り上がりは、毎年秋の法要期間中に開催される「御堂演奏会」に、2日間で1400人も門信徒の皆さんが参加されるように、他の宗派に比べても格段のものとなっています。

* * *

では、なぜ仏教洋楽が、これほどの盛り上がりを見せているのでしょうか。

仏教洋楽の作品集(楽譜集)や仏教音楽論に目を向けると、仏教洋楽を推進する理由は、お^{みのり}法を音楽にのせて伝えるため、と書かれています。

「音楽の心に訴える力」といわれるように、確かにお聖教を読んだり、法話を聴いたりするよりも、音楽にのせた歌としてお法を耳に届けた方が、人の心に訴えかけるものがあるでしょう。そのような考え方は、既に4世紀の終わりごろに神学者のアウグスティヌスがその著作『告白』で同じことを記しているように、洋の東西を問わず古くからみられるもので、的を射たものです。ですから、これまで仏教洋楽が人の心に訴えかける「伝道的手段」として推進されてきたこと自体は、もっともな取り組みとして、評価されるべき事柄です。

ですが、実際に仏教洋楽作品を歌い、今日まで受け継いでこられた門信徒の方々の意識は、そうした「伝道のために」というだけのものだったのでしょうか。

* * *

ここで、注目すべき一つのアンケート結果をご紹介します。

昨秋に開催された御堂演奏会では、出演者の方々に協力いただいたアンケートのなかで、「御堂演奏会に参加する理由は?」という質問をさせていただきました。回答は選択方式ではなく、自由な記述による方法を探らせていただいたのですが、その結果、群を抜いて多かったのが「『ご本山』や『ご真影さまの前』で歌う喜

び」というものでした。それに対し、「歌を通してみ教えを伝えるため」という回答は、ごく僅かしかありませんでした。つまり御堂演奏会で歌うという行為は、伝道を目的としたものではなく、仏徳讃嘆という、まさに門信徒の皆さんの信心歓喜の表現に他ならないのです。

「声明はむずかしくて…。でも仏教讃歌なら、私たちでも歌えるし。これが、私らの仏徳讃嘆なんですよ」——こう話してくださった参加者の言葉が、今でも思い出されます。どうやら、仏教洋楽の推進者の方々(その多くは僧侶)が考えるところとは別の次元で、門信徒の皆さんは、仏教洋楽に積極的に取り組んでいらっしゃるようです。

* * *

では、仏教洋楽は伝道に役立っていないのかというと、そうではありません。

御堂演奏会に参加される多くの門信徒の方々にとって、確かに歌うことは讃嘆の表現かもしれませんが、そのような姿を見ておられる方々にお話を伺うと、ほとんどの方は、いきいきと歌っている姿が、偽りのない、本

当にみ教えに出会った歓びの姿に見える、といわれます。つまり、歌っている門信徒の方々に伝道活動を行っているという意識はなくとも、その心からの信心歓喜の表情こそが、実は聴く人や見る人に、み教えに出会うことの素晴らしさを伝えているのです。

伝えるために歌うのではなく、信心歓喜として歌うことが、結果として伝わることになる。それこそが「仏教音楽の素晴らしさ」ではないでしょうか。

宗教と音楽 仏教音楽は何を伝えるのか?

常任研究員
福本 康之

本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、毎年御正忌報恩講期間中に「御正忌報恩講奉讃演奏会」を開催しています。さらに今年は常例布教（夜座）のまえに「仏教讃歌のひとつ」と題し、約20分間、仏教讃歌の演奏を計6回行いました。

◇御正忌報恩講奉讃演奏会

今年度の御正忌報恩講奉讃演奏会は、梵鐘の音とともに《ふれあるき》の演奏で幕が開きました。最初のステージは、ゲストの浅井順子さんと森琢磨さん、本願寺合唱団（伴奏は丸山千晶さん）のみなさん、そして研究所の研究生による仏教讃歌の演奏です。曲目は、《しんらんさま》をはじめ《そよ風に》や《Namo Amida Butsu》など、みなさんお馴染みの曲でお楽しみいただきました。

続く第二部は、浅井さんと研究生の今小路聡子さん、澁谷暢達さんによる仏教讃歌の独唱や二重唱をお楽しみいただきました。さまざまな機会に仏教讃歌を歌われている浅井さんの演奏は、実に落ち着いた安らぎに満ちたもの。研究生の今小路さんも、仏教讃歌の埋もれた名曲《散華》（曲：山田耕柞）を発掘し、紹介してくださいました。

第三部は、ふたたび本願寺合唱団による合唱で《いのち》と《ほほえみとともに》の演奏。そして、会場の皆さんとともに《念仏》を練習し、最後は会場が一体となった《念仏》の大合唱でお開きとなりました。

御正忌報恩講奉讃演奏会プログラム

オープニング

- ふれあるき（詞：親月浩道 / 曲：中田喜直）

第1部

- 報恩講の歌（詞：黒瀬智円 / 曲：野村成仁）
- しんらんさま（詞：瀧田常晴 / 曲：古閑裕和）
- そよ風に（詞：守安弥末野 / 曲：弘田龍太郎）
- Namo Amida Butsu（詞：シンカク / 曲：ボード）

第2部

- きよけきひかり（詞：親鸞聖人和讃 / 曲：日高脩）
- 散華（詞：小谷のり子 / 曲：山田耕柞）
- 芬陀利華（詞：川上清古 / 曲：山田耕柞）
- そんなときわたしはくちずさむ（詞：親月浩道 / 曲：中田喜直）
- 聖夜（詞：九條武子 / 曲：中山晋平）
- 旅ゆくしんらん（詞：釜瀬春風 / 曲：升田徳一）

第3部

- いのち（詞：藪田義雄 / 曲：下総統一）
- ほほえみとともに（詞：大谷範子 / 曲：竹田えり）
- 念仏（詞：山本有希子 / 曲：森琢磨）



御正忌報恩講奉讃演奏会に出演して

研究生 今小路 聡子



平成18年1月15日、ご本山の間法会館で開催された御正忌報恩講奉讃演奏会に、この度はじめて出演させていただきました。

演奏会は、鐘の音が響き「報恩講さん

だよ～、お参りしよお！」という掛け声と共に幕が上がり、出演者全員による《ふれあるき》で始まりました。この演出は、演奏会独特の心地よい緊張感と同時に、お寺に育った私にとって、不思議な心地よさをも感じさせるものでした。

今回は、独唱をはじめ、本願寺合唱団のみなさんと一緒に合唱させていただいたり、3部からなるステージを楽しませていただきました。なかでも、音楽界で活躍されている浅井順子さんと《聖夜》などの仏教讃歌をデュエットさせていただいたことは、私にとって良い勉強にもなりました。

また会場に目を向けると、プログラムに載った歌詞を見ながら一緒に口ずさんでいらっしゃる方も数多く見受けられました。特に、会場のみなさんと一緒に合唱したエンディングの《念仏》の熱気は、よい思い出です。多目的ホールは演奏会用に設計されてはいないため、演奏会場としては決して満足できるものではないかもしれませんが、今回出演させていただいて、改めてこの演奏会が恒例の行事として広く知られ、御正忌報恩講にお参りすることと併せて楽しみにして下さっている方が大勢いらっしゃることを実感いたしました。何よりもこうしたご縁の尊さを大切にしていきたいものです。





常例布教前「仏教讃歌のひとつとき」

仏教讃歌の可能性を探るべく、新たな試みとしてスタートした「仏教讃歌のひとつとき」。初めてのことで告知も十分できませんでした。演奏会場となった総会所は日を追うごとに多くの方が足を運んでくださいました。

なかでも印象的だったのは、演奏を聴いておられる方の多くが《聖夜》や《ありがとう》など、ご存じの作品を演奏者と一緒に口ずさんでおられる姿でした。会場で歌われていた方にお話を伺うと、「仏教讃歌のよいところは、普通のコンサートのように聴くだけではなく、こうした機会に私たちでも一緒に歌えるところにあるんじゃないでしょうか。み教えに出会えた喜びを、みなさんとともに歌って表現させていただけるというのは素晴らしいことですね。」と、嬉しそうに語ってくださいました。

なお、今年度は以下のみなさんにご出演いただきました。

- 1月10日
澁谷暢達(歌)
馬淵紀久子(ピアノ)



- 1月9日：三浦明利
(歌とギター)

- 1月11日：本願寺合唱団



- 1月14日
今小路聡子(歌)
馬淵紀久子(ピアノ)



- 1月12・13日
トゥループ蓮華

お知らせ

本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、平成18年度も引き続き法要の折などに、総会所での「仏教讃歌のひとつとき」をはじめ、聞法会館でのロビー・コンサート、大谷本廟での仏教讃歌演奏会などを予定しております。現在決定している催しは以下の通りです。みなさまのご来場をお待ちしています。

「仏教讃歌のひとつとき」(会場:聞法会館1階総会所)

◎春の法要期間中

- 4月13日(木) 18:30 ~ 18:50 常例布教夜座前
出演:三浦明利(歌とギター)
- 14日(金) 15:30 ~ 15:50 常例布教昼座後
出演:トゥループ蓮華

◎降誕会法要期間中

- 5月20日(土) 18:30 ~ 18:50 常例布教夜座前
出演:藤の実コーラス

「聞法会館ロビー・コンサート」(会場:聞法会館1階ロビー)

◎春の法要期間中

- 4月15日(土) 12:00 ~ 12:30
出演:龍谷混声合唱団

◎「光慧院釋淨恵(大谷嬉子前裏方)7回忌法要」に際して

- 6月21日(土) 法要終了後
- 22日(日) 法要終了後

◎「下京ルネッサンス」のプログラムとして

- 9月3日(日) 13:00 ~ 14:00

※上記開催分につきましては、時間等が変更となる場合があります。詳細および追加分については、研究所のウェブ・サイトにてご確認ください。

→ <http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>

春季彼岸会期間中に出演いただいた「コーラスふじの花」



奉仕活動としての出演者募集!

当研究所では、聞法会館常例布教に際しての「仏教讃歌のひとつとき」をはじめ、仏教讃歌を奉仕活動として演奏いただける場をプロデュースしていきたいと考えています。各種の法要や行事に合わせて、合唱団や演奏グループでご本山に参拝された折に、演奏奉仕をしていただける場合は、ご相談ください。詳しくは、本ニュースレター最終ページに記載の電話番号までお問い合わせください。



歌い継がれるみ法の響き —— 龍谷混声合唱団

研究助手 山口 篤子

昨年2005(平成17)年12月、龍谷混声合唱団の第60回定期演奏会が京都公会館で開催されました(写真)。この合唱団は、宗門関係校の龍谷大学男声合唱団と京都女子大学女声合唱団によって、仏教讃歌の演奏を主な目的として結成され、活動を展開してきました。第1回の定期演奏会が開かれたのは1946(昭和21)年12月——それから60年もの間、仏教讃歌の歌声は絶えることなく響き続けています。龍谷混声合唱団(以下、龍混)は創立当初から、上村けいや林達次(いずれも故人)など、関西の優れた音楽家たちの薫陶を受けてきました。その活動は既存曲の演奏にとどまらず、新曲の委嘱・発表・楽譜刊行など、仏教音楽の創作・普及にも大きな役割を果たしてきました。龍混によって生み出された作品には、《大無量寿経讃》(詞:宮地廓慧、曲:大栗裕)やカンタータ《無憂華讃歌》(詞:観月浩道、曲:網代栄三)などがあります。

最近の合唱団について、現役の団員さんにお話を伺いました。龍混の定期演奏会は毎年12月に開催されますが、その他の活動として毎年6月に開催される京都合唱祭(京都府合唱連盟主催)にも参加し、一般の合唱団にまじって必ず仏教讃歌をも歌っているそうです。「合唱祭は、一般の人に仏教讃歌を聴いてもらえる、いいチャンスなんです」と、現役の



第60回定期演奏会OB・OG合同ステージ

団員は誇らしそう。さらに毎年夏には、龍大・京女それぞれ単独の定期演奏会と演奏旅行を行っているとのこと。龍谷混声と単独の活動の両立は忙しくて、なかなか大変だそうです。「男声/女声だけで合唱するのもいいけれど、混声になると普段と違うことができるし、楽しいです」と笑顔をみせてくれました。

ところで、合唱団が結成された頃とは違って、最近では、大学に入るまで仏教讃歌を一度も聴いたことがなかったという団員がほとんどだとか。仏教讃歌の何たるかも分からず、みんな初めはカルチャーショックを受けるものの、歌詞を勉強をしたり、その意味するところを訊ねたりしているうちに、仏教讃歌の魅力に気付き、惹きつけられていくのだそうです。そうして培われた想いは、卒業後も消えることはないようで、みなさん龍谷混声のOB・OGとして、仏教讃歌を歌う合唱団を立ち上げたり、音楽法要で讃歌衆をつとめたりと、全国各地で仏教音楽の活動を支えてくださっています。

60年間仏教讃歌ひとすじに活動してきた龍谷混声合唱団。70年、さらに100年と歴史を重ねていったとき、どのような仏教音楽を聴かせてくれるのか——今後がますます楽しみです。

■Information

7月に龍谷大学・京都女子大学それぞれの合唱団単独の定期演奏会が開催されます。詳しくは、イベント情報(p.11)をご覧ください。

■「龍混OB・OG有志の会」

毎年100名前後の参加があるこの会は、今回で15回目を迎え、一般の方にも開かれた催しとなっています。日時は5月30~31日、場所は飛騨高山です。観光や懇親会のほか、音楽法要も予定されていますので、どうぞご参加ください。

本願寺合唱団の再生

常任研究員 前田 正樹

本願寺合唱団は1966(昭和41)年に、「勤式指導所」に付属する団体として、発足しました。発足当時は龍谷大学男声合唱団のOBと本願寺宗務所員による男声合唱団でしたが、やがて京都女子大学女声合唱団のOGが加わって混声合唱団になりました。1973(昭和48)年に第一回「御正忌報恩講奉讃演奏会」が開催され、「仏教音楽研究所」に移管されます。その後、宗門内の様々な行事に参加し、「音楽法要」では中心的な活動を行ってきました。永い歴史の中では、定期演奏会も行っていたのですが、近年は若干下火となっているこ

とは否めません。

来るべき親鸞聖人750回大遠忌法要をお迎えするにあたり、本願寺の名をいただく合唱団としてこの際、大変革を行う必要に迫られてきたといえるでしょう。

「音楽法要」はもちろんのこと、各種の録音事業や、イベントにおいても、優れた演奏を行うことが望まれます。かつて東本願寺は「大谷楽苑」を擁し、「讃仰歌」を数多く生み出し、優れた演奏を行ってこられました。その姿を範として、格調高く感動を呼ぶ演奏ができる団体へと変身をはかるべく「本願寺合唱団再生計画」をすすめてまいります。従って、団員募集も新たに行なってまいりたいと考えています。計画発表までしばらくお待ちください。



歌に聞く



委託研究員 鹿多 証道

「日本のうた ふるさとのうた」百曲を選ぶ企画がありました。元号が昭和から平成に変わり、もうすぐ世紀の変わり目…の頃だったと記憶しています。全国から65万7千人がはがきで1曲を選び、総曲数は5千曲を超えたそうです。出版された百曲集には学校で歌われた唱歌を中心に、童謡や郷土色の豊かなものが含まれていました。誰もがどこかで口ずさんだ歌の数々…。人が人を思い、花に心を寄せ、月や雪にも「いのち」を見えています。歌詞に擬人法が多く用いられているのは、その証しではなかったでしょうか。親しい呼びかけや優しいやり取りに心の和む思いです。

百曲各々に作詞者と作曲者がいます。重複も不詳もありましたが、その中に仏教讃歌の創作に関わった人たちが少なくありません。多くは故人ですが、思いはことばと旋律に残りました。確かな言葉遣いと美しいメロディーは、音楽の世界を超えて大切なことを発信し続けることでしょう。

時は春、百花撩乱の中に何がお好きですか？ 人の好みに違いはあっても、花の有りよう・咲きようは花それぞれに固有のものです。同じ枝にも同じ花なし…。それを一言に「きれい」と歌うとき、花と微笑みを交わすわたしに気付かされるのです。

赤／白／黄色、花壇に咲いたチューリップ…。「ドノハナ ミテ モ キレイ ダ ナ」(エホンシャウカ／昭和7年発刊)と、今年も歌う頃になりました。

●鹿多先生には、「仏教讃歌」と法話を結び付ける可能性について研究をお願いしています。

コール無憂華 — 30周年記念コンサート

朝倉 浩子

福井教区寺族婦人合唱団『コール無憂華』は、おかげさまで昨年30周年を迎えさせて頂き、2005(平成17)年6月3日に福井別院本堂にてコンサートを開催いたしました。教区・別院・寺婦・仏婦の協賛をうけ、四百余名という大勢の来場者に聴いて頂くことができました。



賛助出演には、昨年25周年を迎えられました僧侶雅楽同行会『雅友会』様、一昨年7月の福井豪雨で大変な被害を受けられた河和田組仏婦『ときわ』様、少人数ながらしっかりとしたハーモニーを聞かせてくださる若々しい福井組西蓮寺『ホワイエ蓮』様と総勢100名近くの歌声が本堂いっぱい響き、最後に会場の皆さまと出演者が恩徳讃を二部合唱した時は、胸一杯になりました。サブタイトル『みほとけとともに』とありますように、仏教讃歌は美しい調べにのったおみ法です。出会いもたくさんありました。どうぞたくさんの方が仏教讃歌を聴き、歌って頂きたいものです。

合掌

●原稿は早くにいただいておりますが掲載が遅くなり申し訳ございません。お寺や組、教区でも《念仏》などを門信徒のみなさんとともに歌っていただき、ほんとうに喜んでいただいているとのことでした。今後とも地道な活動をお願いしたいと存じます。

兵庫教区仏教讃歌コーラスフェスティバル

2006(平成18)年2月1日(水)、本願寺神戸別院において、兵庫教区寺族婦人会連盟や仏教婦人会連盟の呼び掛けで、第一回「仏教讃歌コーラスフェスティバル」が開催されました。このように教区全体の合唱団が集まって日頃の練習の成果を発表することで、相互交流と、演奏技術の向上がはかれるでしょう。また、指導者や演奏家の交流とともに、「音楽法要」を共同で開催することにもつながり、益々仏教讃歌活動が盛んになるものと期待されます。



11団体延べ235名が出演。満員の会場は仏教讃歌の歌声が響きわたりました。

連載：資料が語るあの時あの場所

第1回 「花まつり」はヨーロッパ生まれ!?

常任研究員 福本 康之



「花まつり」といえば、いわずと知れたお釈迦様の誕生をお祝いする行事です。ほかにも「釈尊降誕会」とか「灌仏会」、「仏生会」という呼び方もありますが、「花まつり」ほど認知された名称ではないでしょう。

ですが、この「花まつり」という呼び方、実は意外と新しいものなのです。実際、明治時代の仏教唱歌集を繙いても、「釈尊降誕会」や「釈尊誕生の歌」、「四月八日」などのタイトルは見られるのですが、「花まつり」という名の作品を見つけることはできません。

飛鳥寛栗氏によると、初めて「花まつり」の名称が用いられたのは、1901（大正5）年に開催された大日本仏教青年会主催の「第一回花まつり」とのこと。しかも、このイベント名すら、実は1901（明治34）年にベルリンで開催された釈尊降誕会に由来するものなのです。

この20世紀最初の年にベルリンで開催された釈尊降誕会は、当時ドイツに留学していた宗教学者の姉崎正治や作家の巖谷小波が主催したものでした。その会場では、釈尊の誕生仏が花で埋まるように飾られ、ヴァイオリニストの幸田 幸（幸田露伴の末妹）が音楽を奏でるなど、華やかに釈尊の誕生が祝われました。そして、この光景を目にしたドイツ人が「Blumenfest（=花の祭り）」と呼んだことが、「花まつり」と呼ばれる切っ掛けとなったのです。

釈尊降誕会がちょうど桜の季節にあたる日本では、「花まつり」の名前が程なく広まっていきました。今日では考えにくいことですが、大正末期から昭和初期にかけての4月上旬の新聞には、数多くの「花まつり」の文字が踊っていたのです。仏教音楽協会から《花祭りの歌》（詞：井上賢順、曲：大中寅二）が最初の仏教聖歌として発表されたのも、丁度そんな時代でした。

※参考文献：飛鳥寛栗『それは仏教唱歌から始まった』樹心社

連載：仏教洋楽人物プロフィール

第1回 お寺に生まれた作曲家 清水 脩

おさむ

研究助手 山口 篤子



清水脩という作曲家をご存知でしょうか。名前は知らなくても、《恩徳讃》の作曲家といえばピンとくる方も多いかと思います。

1911（明治44）年に大阪・天王寺の真宗大谷派寺院に生まれた清水は、大阪外国語学校（現在の大阪外国語大学）でフランス語を学んだ後、東本願寺研究生として東京音楽学校（現在の東京藝術大学）選科で作曲を学びました。みなさんに馴染みの深い《恩徳讃》は、1952（昭和27）年に東本願寺から発表されましたが、その15年後、彼はもうひとつの《恩徳讃》を作曲することになります。1967（昭和42）年に、本願寺派ハワイ開教区からの委嘱によって作曲・発表された《Dedication》という作品です。現地では“English Ondokusan（英語の恩徳讃）”と呼ばれ、今日ではハワイだけでなく、広く海外で親しまれています（詳しくは「メロディーの宝石箱66」『めぐみ』193号（仏教婦人会総連盟発行、2006年3月）をご覧ください）。

清水脩は1986（昭和61）年に亡くなりましたが、《恩

徳讃》以外にも多くの仏教音楽作品を残しています。そのなかには、龍谷混声合唱団や大谷大学男声合唱団など、仏教音楽を歌う合唱団のために書き下ろした作品や、親鸞聖人や蓮如上人の遠忌を記念して作曲した管弦楽による大規模な仏教音楽作品も含まれています。以下に、その主な作品を紹介しておきましょう。

交声曲《蓮如》（詞：土岐善麿）

蓮如上人450回忌法要記念作品

《たとひ大千世界に》（詞：親鸞聖人和讃）

《煩惱にまなこさへられて》（詞：親鸞聖人和讃）

龍谷大学男声合唱団委嘱作品

交声曲《歎異抄》（詞：土岐善麿）

親鸞聖人700回大遠忌記念東西本願寺委嘱作品

《歎異抄より 四つの有縁の歌》（詞：親鸞聖人和讃）

管弦楽を伴う仏教音楽作品は、今日でも決して多いとはいえません。ですから、清水脩が活躍していた頃の状況となると、推して知るべし、です。そういう時期に

連載：歌ってみませんか 第1回

さんげ
《散華》
(詞:小谷のり子 曲:山田耕筰)

研究生 今小路 聡子

この曲は、1933(昭和8)年に仏教音楽協会から刊行された第5回『仏教聖歌』にて発表された作品です。「どなたでも気軽に口ずさめる」ことが、仏教讃歌に求められている条件だとすれば、この曲はそれには当てはまらないかもしれません。ならば、なぜこの曲を紹介するのか——それは、たおやかで優美なこの“歌曲”に、きっと魅力を感じて頂けるに他ならないからです。

冒頭の「輝く大空 みどりの野山」では、かがやく(か→が) おほぞらみどり(ぞ→ら)(み→ど)の音程の大幅な跳躍に気をつけましょう。次の「光豊かに 朝日は昇る」では、ゆたかにの下線部



にこの臨時記号に留意して長調の響きを感じましょう。フレーズ(節)を2小節単位ではなく、4小節単位に区切って、スケールの大きさを表現することも肝要です。「佛の御姿 拜みまつり」では、流れるような3連音符のピアノ伴奏に乗って軽くさらりと歌いましょう。「香り高き 花を散らして」は同じメロディの繰り返しなのですが、かおりたかきをf(強く)、はなをちらしてをp(弱く)で歌わねばならず、この曲最大の難所となっています。pで歌うときに音程が下がらないよう、特に「は」と「ち」の発声を十分に腹筋で支えることが必要です。そして最後のフレーズ「讃えまつらん 大御恵」は、それまで情景を描写した後に唯一“私”の意志を表現するフレーズとなるので、たたえまつらむおほみめーぐみの下線部で示した同じ高さの音がばらつかないように留意して、決然と歌い終わりたいものです。

清水があえて大規模な作品を書き、また学生による仏教音楽の運動にも協力を惜しなかつたのは、やはり彼が真宗のお寺に生まれたためでしょう。その意味で清水脩は、仏教音楽の歴史においてとても重要な存在なのです。



*本願寺出版社発行
CD『歎異抄より 四つの有縁の歌』
定価2,100円(税込)

さんげ
《散華》 詞:小谷のり子 曲:山田耕筰

か が や く お ほ ぞ ら み
あ め つ ち お ほ ひ し あ

ど ら し の き や え ま て ひ に か ほ り ゆ た の か か に あ つ

さ き ひ は の し ぼ ろ し ほ と け の み ー す ー が ー た お

が み ま つ り り か い ほ ろ も た き よ き き は な を ち ら

し て た た へ ま つ ら む お ほ み め ー ぐ み

- 一 輝く大空 緑の野山
光ゆたかに 朝日は昇る
佛の御姿 拜みまつり
- 二 天地蔽ひし 暴風は消えて
白ひほのかに 月かげ白し
佛の御姿 拜みまつり

香り高き 花を散らして
讃えまつらむ 大御恵

色も清き 花を散らして
讃えまつらむ 大御力



みる・きく・よむ

豊原大成『こどものおつとめ』

音楽礼拝あるいは音楽法要と呼ばれる西洋音楽を用いたおつとめには、いくつかの種類があります。ですが、子供向けで知られているものとなると、わずかに中田喜直氏の作曲によるものぐらいいきありません。

そのような状況に鑑み、幼少期からの宗教的情操の涵養が大切であると考え、豊原大成氏（阪神西組西福寺住職・元総長・本願寺派宗会議員・津村別院輪番・堺別院輪番）が、このたび子供向けのおつとめを自ら作詞・作曲されました。本書に収録された「おそなえ」（献花・献灯）から「おつとめはすみました」（回向）までの5曲から成る『こどものおつとめ』がその作品です。このおつとめは、「子供向けに、わかりやすい言葉と、難しすぎず親しみやすい旋律で」と語る豊原氏の想いの詰まった、可愛らしくも上品な仕上がりとなっています。

聞くところによれば、すでにいくつかのお寺では、このおつとめが勤修されたそうです。この新しいおつとめを、お子さんたちと一緒に、お寺で練習し、お勤めされてはいかがでしょうか。

◇書籍データ

豊原大成『こどものおつとめ』 CD付
自照社出版、税込価格1050円 ISBN4-921029-74-1

1. おそなえ
2. ののさまにごあいさつ
3. よい子の三帰依文
4. はすのお花の（おつとめ）
5. おつとめは すみました（回向）



みんなちがってみんないい

～ 金子みすゞの詩と歌 ～



中田喜直歌曲集『ほしとたんぼぼ』
発行所：音楽出版ハッピーエコー

金子みすゞは、大正時代の童謡詩人です。20歳の頃より雑誌に詩を投稿し、当時すでに高い評価を得ていました。彼女の死後半世紀もの間作品は埋もれていましたが、近年になって遺稿が発見されてから急速に注目を集め、今ではブームと言えるほどの人気を呼んでいます。

みすゞの詩は、やさしい言葉で、身の回りの小さな世界を表現しているところにその特徴があるといえます。また、どの詩にも、弱いものへの温かいまなざしが感じられます。ただし、それは冷静な批評家の目から発せられた、ある種のきびしさを含んだまなざしとも言えるかもしれません。読み手は、簡潔な文体の行間から、彼女の揺るぎない、強い思いを受け取ります。彼女の詩が、心の素直さと強さ、穏やかさと鋭さの両面を持っているからこそ、時を経てなお人々の胸を打つのでしょう。

このようなみすゞの詩は、現代の作曲家たちをも惹きつけます。彼女の詩から多くの音楽作品が生まれています。主なものを以下にざっと挙げてみましょう（作曲家・タイトル 順不同）。大竹久美《金子みすゞの詩による七つの混声合唱曲 みえない星》、鈴木憲夫《混声のための合唱ファンタジー みすゞこのみち》、中田喜直《金子みすゞによる童謡歌曲集》、横山裕美子《二部合唱とピアノのためのみすゞとの旅》、三善晃《金子みすゞの詩による五つの詩曲》など。また、数はそれほど多くはありませんが、CDもいくつか出ています。2枚ご紹介しましょう。松倉とし子さんの歌う『金子みすゞ・中田喜直の世界他 — 童謡歌曲集 — ほしとたんぼぼ』は、上記に挙げた中田喜直さんの作品を収録しています。ちひろ『わたしと小鳥とすずと』は、シンガー・ソング・ライターのちひろさんが作曲し自ら歌っています。どちらのCDにも《わたしとことりとすずと》が入っていますので、聴き比べてみても面白いかもかもしれません。中田喜直さんの曲は、軽快で可愛い雰囲気があり、ピアノのパートに鈴の音を模倣したような響きがきこえます。ちひろさんの曲は、もっとポップな曲調でちひろさんの透明感のある声が印象的です。みすゞの作品が、メロディーを得て新たな世界を見せています。

イベント情報

- 5月21日(日) 11:30 ~ 12:20
親鸞聖人降誕会「宗祖降誕奉讃法要(音楽法要)」
 西本願寺総御堂
 * * * * *
- 5月12日(金) 12:30 開演
第二回東海教区「仏教音楽の集い」
 本願寺名古屋別院 入場無料
 平田聖子さんによる自作歌曲集《本願力にあいぬれば》
 の歌唱指導など
- 5月13日(土)
本願寺堺別院 蓮如上人御祥月法要
 13:30 ~ 法要と法話
 法要終了後(15:30頃)記念行事 ちひろコンサート
 本願寺堺別院本堂 入場無料
 問合せ: 本願寺堺別院
 電話: 072-232-4417 担当: 藤範雅史
- 5月14日(日) 14:00 開演
アジアの子どもたちに学校を贈る 菩提寺岐阜チャリティー公演
 岐阜サランカホール 入場料: ¥1,000(当日¥1,500)
 本願寺派・大谷派関係の合唱団、独唱、筑前琵琶と語り等、
 伝統仏教の深遠と日本宗教音楽の新たな感動を!
 問合せ: 仏教文化振興協会岐阜公演実行委員会事務局
 電話: 052-303-8316
- 7月1日(土) 13:30 ~ 16:30
第8回仏教讃歌リサイタル チャリティーコンサート
 サンビームやない(山口県柳井市) / 主催: 村上智真
 本願寺聲明・舞楽、仏教讃歌(ちひろ/姜暁艶/藤井文子)
 入場料: 前売り¥3,500(当日¥4,000) 高校生までは無料
 問合せ: 仏教讃歌に聞く会事務所
 電話: 0820-22-0400
- 7月1日(土) 18:30 開演
龍谷大学男声合唱団 第39回定期演奏会
 右京ふれあい文化会館 入場料: ¥500
 顧問指揮者: 津田圭悟
 問合せ: 090-5166-8301(担当: 宝谷)
- 7月8日(土) 18:00 開演
京都女子大学女声合唱団 第44回定期演奏会
 京都市西文化会館ウエスティ 入場料: ¥500
 指揮者: 田中純
 問合せ: 090-2031-7854(担当: 野路)



龍谷混声合唱団 第60回定期演奏会
 龍谷大学男声合唱団・京都女子大学女声合唱団

■雅楽器による仏教讃歌

本願寺には仏教音楽として素晴らしい雅楽の伝承がなされています。その雅楽を、みなさんにより身近に感じていただくために、「仏教讃歌」の名曲を本格的な雅楽にアレンジしてお届けすることを企画しております。これは「現代に即応した儀礼・法要」を執行するに相応しい環境づくりの一助とするため、親鸞聖人750回大遠忌法要宗門長期計画の一環として推進したいと考えています。

一般寺院での法要や学校・幼稚園・保育園などの様々なイベントのBGMとして、また、仏前結婚式の入退堂や念珠交換などの場面でご使用いただけることを願っています。さらには、全国の雅楽演奏団体の方々にも演奏していただけるように配慮したいと考えています。どうかご期待ください。

■仏教讃歌全曲録音プロジェクト

2005(平成17)年度より当研究所の経常業務としてすすめておりました「仏教讃歌全曲録音プロジェクト」も、2006(平成18)年3月末までに、約120曲の収録を終えました。この中には、CD等の音源として未発表のものも含まれており、当研究所の資料とする他、皆さまのご要望に応じて提供させていただくことを目的としています。研究員による独唱版と、ピアノのカラオケ版があります。すでに、緑の「仏教讃歌」楽譜集はほぼ終了し、その他、「仏教音楽協会」からの発表作品やハワイで出版された『Praises of the Buddha(仏教讃歌)』掲載作品の録音が進行中で、今後さらに多くの曲を収録してまいります。収録曲についてのお問い合わせ、仏教讃歌の練習等にご使用を希望される方は、研究所までお申し付けください。

■大谷本廟「仏教讃歌」演奏を始めました

春季彼岸会に際して、大谷本廟 礼拝堂にて「仏教讃歌演奏会」を行いました。事前告知が十分ではなかったものの、当日、境内で演奏とチラシを配り、来場者をつのりました。今後は春秋のお彼岸、お盆(8月)の時期などに、恒例行事として開催し、墓参の方々にお聞きいただきたいと考えています。



連載 本願寺 折々の文化

— 親鸞聖人の降誕会をしのぶ —

籠谷 眞智子

京都女子大学名誉教授
本願寺仏教音楽・儀礼研究所 客員研究員



西本願寺で宗祖聖人の降誕会が恒例化するののは、1874(明治7)年ごろからとされています。

このことは、明治時代の西本願寺明如法主の日記(『奥日次』明治7年5月21日条)に「当年より降誕会御祝儀あらせられ候」とあり、その中に「二十一日始て宗祖降誕会を修す」と明記してあります。

また、明治7年当時の降誕会法要は、「本堂祖堂ともに平常」の通りで、とりわけ降誕会を祝うアトラクションなどはとりおこなわれなかったようです。

現在、宗祖降誕会のアトラクションとして西本願寺で開催される祝能は、門信徒をはじめ一般市民の間にもたのしまれています。このように、西本願寺の降誕会祝能が一般に親しまれるようになるのは、1891(明治24)年ごろかららしい。このことは『明如上人日記抄』の明治24年5月8日の条に「三井高朗より能楽寄附申出候(中略)来る二十一日降誕会に候得共、大学林始市中旧

境内一般賑々敷候には、該日午後一時より右能楽披催度」とあることによってあきらかです。またこの明治24年の降誕会祝能は、三井高朗の懇志による献納能であったことが伝えられています。このように降誕会能の開催に、三井氏のような有力な門信徒の支援があったことは留意すべきでしょう。

話はさかのぼるが、明治22年ごろ、降誕会祝賀行事に、籠谷大学の前身である大教校や普通教校の学生たちが参加し、英語・清語(中国語)などの演説会を催したことも忘れてはなりません。さらに明治28年5月14日の明如法主の日記によると、本願寺は上賀茂神社の能舞台を三百円で借用し、門信徒や一般観覧者の入場をはかったといえます。このとき借用した舞台は、「御影堂白砂」に設置したと『明如法主日記』に伝えられています。

また、明治28年当時、上賀茂神社から能舞台を借用した費用が三百円というのも留意すべきでしょう。

本願寺の門信徒は現在もなお宗祖親鸞聖人への景仰もふかく、また門徒衆の信仰は、能楽のような文化行事の中にも、こころをそそいでいることがおわかりいただけたでしょう。

■編集後記

春の訪れとともに閉幕したトリノ冬季オリンピック、そして日本チームが優秀の美を飾った史上初めての世界野球大会(WBC)が世界中の人々に感動をもたらしたことは記憶に新しい。勝ち負けはともかく私達が選手に心から声援を送り、感動し、そして涙した理由は、選手達のひたむきな努力とそれを支えるスタッフ達の熱い心意気に心を打たれたからではないでしょうか。

そして様々なシーンで奏でられた「音楽」もまた、私たちが感情移入し感動を呼び起こした大きな原動力となったことを再認識させてくれました。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、仏教讃歌をはじめとする仏教音楽を通して、一人でも多くの方々がお念仏のみ教えに出遇えた喜びとその感動を共感しあえる、そんな機会が増えることを願ってやみません。

親鸞聖人750回大遠忌法要に向けた「新たな始まり」として、これから読者の皆さまと共に様々な仏教音楽活動を企画・展開したいと考えております。素敵なアイデアやご意見・ご要望をお待ちいたしております。

(事務局)

■Webサイト・リニューアル

勤式・仏教音楽研究所のWebサイトが、4月より「本願寺仏教音楽・儀礼研究所Webサイト」としてリニューアルになります。新しいサイトでは、本紙と連係しながら、さまざまな情報を発信していく予定です。どうぞご期待ください。

■バックナンバー、及び本号の追加配付、新規購読希望は下記までお申し付けください。

『佛教音楽 ニュースレター』 第二号 (1巻2号)

編集 本願寺仏教音楽・儀礼研究所
<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>
発行 浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
所長 上山 大峻
〒600-8349
京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地
本願寺第3庁舎内
TEL. 075 (371) 9244 FAX. 075 (371) 5761
発行日 2006(平成18)年3月31日
頒価 無料